

さわやかに勝山の街を疾走

5月12日、13日の両日、ジャムリゾートとかつやま恐竜の森（長尾山総合公園）を拠点に、自転車の大会「サイクルフェスタin勝山2007」が開催されました。

初日はマウンテンバイクの3時間耐久レースが行われ、全国から73組125名が参加しました。好天の下、1周約5キロのコースを3時間で何周できるかを競い合い、起伏に富んだコースを一気に駆けていました。

2日目は、標高差約730mを駆け上がるヒルクライムに244名が参加し、その中で、池田隆人さん（11歳東京都町田市）がキッズクラスで優勝しました。池田さんは「自転車が好きで、小学3年生の時から始めました。毎日のように練習していてレースにはよく出場していますが、登りだけのコースは初めてで大変でした。」とのことでした。



市内を自転車で散策する参加者

また、市内の観光地などを自転車で巡る「ぐるっと勝山うまいもんツーリング」も行われ、参加した74名は新緑の映える平泉寺などを見てまわり、手打ちそばやソフトクリームなどを堪能していました。



付き添われながら参道を歩く稚児

世界の最もきれいな都市 第9位に勝山

アメリカの経済誌「フォーブス」の電子版で4月16日に掲載された、「世界で最もクリーンな都市ランキング」で勝山市が第9位に入りました。ベスト10の他の都市は全て欧米の有名都市が占めており、アジアでは勝山だけがランクインしました。

このランキングは、コンサルティング会社「マーサー」が世界215都市を対象に毎年行っている「世界生活環境調査」のデータを使用しており、世界生活環境調査自体は、政府や民間企業が従業員を海外に派遣する際の「ハードシッピング（赴任）手当」決定のためのデータを作成する目的で行われています。

今回は、主要10部門の中の健康・衛生ランキングを参考に発表されていますが、医療サービスや下水道設備・廃棄物処理施設の充実度、大気汚染の有無などが評価対象となっており、それらが高水準となったようです。

6月は環境月間ということもあり、いま一度きれいな勝山を見つめ直してみませんか。



フォーブスのホームページから（インターネットで「世界の最もきれいな都市」で検索をかけるとランキングが見られます）

がんばれ！河

水泳競技で

県記録を5年ぶりに更新



受賞に喜ぶ酒井さんと島田コーチ

酒井龍汰さん（11）＝遅羽町新道＝

6日、1日数時間の練習で5〜7キロメートル程度泳いでいます。

酒井さんはクラスで整列すると前から2番目という小柄な体格で、水泳の場合不利な条件となります。しかし、酒井さんは、手と足のタイミングがバランスよく、特に手のひらで水をかく能力は持って生まれたすばらしい才能だそうで、マイナス面を大きく補っています。担当の島田コーチは、「持ち前の能力は、練習により身につくものではなく、酒井さんに与えられたもの。今後、体が大きくなれば、まだまだ記録を伸ばすことができます。今北陸で3本の指に入る実力の持ち主。本当に、これからの楽しみですね。」と酒井さんを絶賛します。

三室小学校6年生の酒井龍汰さんは、4月29日に福井市で開催された県水泳連盟主催の県室内選手権水泳競技大会で、400メートル個人メドレー男子無差別の部に出場して5年ぶりに県学童記録を更新しました。そして、この功績がたたえられ、勝山市水泳協会から表彰を受けました。

「ダッシュは、こうです。」と苦笑いの酒井さん。「ダッシュとはレースを想定した練習で、最大限の力を出しながら繰り返し練習するから大変です。」と島田コーチ。将来の夢はオリンピック出場で、目指す選手はイアン・ソープと北島康介選手。酒井さんは、6月末の富山の大会に向けて現在練習中です。

青春群像

おばあちゃんの知恵袋を受け継ぎたい

伊藤 宗 幸さん（26）＝北市＝



おじいちゃんやおばあちゃんが大事に守ってきた田畑を守り、今も現役で元気なおばあちゃんの知恵袋を受け継ぎたいと数年前から農業に従事し始めた伊藤宗幸さん。「まだ、家庭菜園のレベルです。」と言いな

で不安定なので気苦労を感じます。しかし、自分が作った野菜が対面販売などで売れて、「おいしい」という生の声を聞けたときは嬉しくもあり、農業をやって良かったと思えます。」と笑顔がほころびます。

「でも、親戚のかたや父親の職場の同僚から畑の世話の依頼を受け、おばあちゃんと2人で力を合わせて野菜作りなどに精を出す頼もしい青年です。」

これからの目標は、「まず、経営を安定させること。そして、若者が農業に関心を持つような取り組みがしたい。」とのこと。友達と趣味のドライブに興じるときも農業について語り、農業への関心を引くように努めているそうです。好きな言葉は、「有言実行」。伊藤さんは、流した汗に収穫で応えてくれる農業に、体当たりでがんばっています。

父親の技術支援を受けながら、幅12m、奥行き60mのビニールハウスを建て、今、越のルビーや花口ケツトのミニトマトを栽培しています。「休みがないことや、まだ収入面